

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
俳誌交歓	31
3月号月評	32
恵贈句集拝見(72)	34
恵贈俳誌拝見(38)	36
特別作品「秋のイギリスを訪ねてⅡ」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
琵琶湖俳句サロン(5)	45
句集「野山の道」共鳴句	46
他誌転載	48
イザナミの言語学(3)	50
宝山寺・往馬大社吟行	52
エッセイ「鶴と小父さん」	54

今月の一句

深雪被て黒部電車の湯町寝に 桂樟蹊子

晩年仕事が沢山ある時はよく仕事を携えて、温泉町へ湯治に行かれた。この句は宇奈月にいかれたときの作である。「雪を被し黒部電車」のあと五字を生かすのに苦労したと仰しゃる。京都に戻って約一か月四十語位を下五に書き連ねたあと、編集日の朝やつと「湯町寝に」という措辞を得られたそうである。師の句への取り組みの姿勢の真摯さの窺われる一句である。

冬ぬき

塩路隆子

元旦と言へど威儀張ることもなく
とんどの火素顔の月を燻らす
ふくろふの夜鳴き聞きつつ寝落ちける
冬萌を踏みて小さき咎を抱き
マイカーと呼ぶ三輪車掛飾
着ぶくれて猿のさまの影作る
りとゑある五十音図や冬ぬき

三月号光耀抄

塩路 隆子選

水仙や海鳴り響く漁師宿
もののふの塚を抱きて雪をんな
初夢の天馬の背中亡兄の影
腰繩の猿に投げ銭三日はや
雪搔きの済みたる浦や鳶の声
点滅を忘じし聖樹孤独感
奈良太郎響く千年年新た
ものの芽のあまた天指す日和かな
鷹舞へる空へ勝鬨義士の列
配り餅餡の塩梅褒めらるる
早仕舞柚子湯にいやす身の軋み
初雀つくばひに來て囃しけり
餅つきや穏やかに日は流れける
平凡に自足のくらし福寿草
北風が吹き抜けて行く高架駅
車椅子自在に冬の廊下往く
冬靄の晴れたる湖上神の島
足袋を縫ふ祖母は仕上げの木槌音

鈴木 照子
西郷 慶子
山口キミコ
橋本 靖子
坂上 香菜
北尾 章郎
中村ふく子
国包 澄子
片岡久美子
松岡 和子
笹井 康夫
竹内 悦子
中井 弘一
中本 吉信
西田 史郎
能勢 栄子
藤見佳楠子
増田 一代

粉雪の舞輕やかにアン・ドウ・トゥア
 遠き日の絵本のごとし日向ぼこ
 終ひ弘法下駄の片つぽ売られたる
 屠蘇袋浸すや遙か鐘の音
 上棟をじつと見守る懐手
 三日はやいつもの朝餉炒卵
 年新た億光年の星の下
 草鞋きりり義士の日響く陣太鼓
 駅伝のここが勝負や権太坂
 布団干す竿にやんはり棲む冬日
 葉を落とし仁王立ちせる冬木立
 湯上りの生姜湯を呑みメール打つ
 床の間にしばしの主鏡餅
 野仏の裾より浮遊雪ばんば
 関羽いま戦の渦中読始む
 吾が辞書に老残は無し寒波来る
 寒の音ひびく静寂や添水鳴り
 寒すずめ命集めて夜に入る
 脱三日坊主を誓ひ初日記
 土鍋に炊く粥にとろりと寒卵

松田 和子
 三川 美代子
 宮崎 左智子
 宮田 香
 井口 淳子
 石川 かおり
 伊東 和子
 伊藤 和子
 伊藤 純子
 大松 一枝
 桂 敦子
 木戸 宏子
 笠井 清佑
 坂根 宏子
 阪本 哲弘
 塩路 五郎
 辻 香秀
 常田 創
 森下 康子
 田中 浅子

手につつむ湯呑のぬくみ玉子酒
 あんかう鍋われに足りぬはコラーゲン
 初鳩や番めでたく松の枝に
 胼滲みて妣の嘆きを耳奥に
 エンディンググノート未完や除夜の鐘
 制服の紺のひと際濃き真冬
 限界に挑む気力や大旦那
 運が付くと冬至南瓜を煮てをりぬ
 耳塚へ尻届く故郷より
 寄せ鍋の箸触れてより友となる
 大判に福笹しなふ肩の先
 師走風に頼もしくなる干野菜
 川の辺に寂光放ち枯すすき
 七種の粥の温もり命あり
 深夜便の隠居大学寒の入
 伊勢海老の残酷焼に目を逸らす
 駅伝を寿ぎたる比叡雪化粧
 屠蘇祝ふ尺余の鯛に睨まれて
 初詣出雲の国の割子蕎麦
 買初の客が犇めく戎橋

杉本 綾
 中井登喜子
 稲田 和子
 山本 孝夫
 山田 愛子
 吉田 希望
 川崎 利子
 小澤 菜美
 黒住 康晴
 小西 和子
 小林 久子
 佐々木 和子
 佐用 圭子
 鈴木 江奈
 鷲見たえ子
 高谷 栄一
 谷口 俊郎
 辻 知代子
 津田 富司
 土井久美子

イケメンの布教師の説く十夜寺
木守柿湖北に旧き葛屋葺

橋桁を罫としたる冬燕

師走風一万人の歌「歓喜」

冬の旅子の住む町の葛飾区

重誥の手作りまさに五つ星

膾にとさくさくきざむ太大根

葉牡丹の寄植市や福を買ひ

山茶花の見上げているよ青き空

福袋フアツシヨウシヨとなりけり

初場所や鬮肩力士の初日負け

群鴉ねぐら争ふ冬の暮

鴉来て影絵のやうな冬木立

由由しくも賀茂の社の卯杖かな

夕の雪少し日暮を遅らせて

七種や火箸で囃す父の声

国宝の三尊照らす冬灯

修行者の吐く息白し朝の行

仏壇に湯気ほのぼのと雑煮椀

鶏旦やかみしも着たる渡舟守

参道の長寿櫛や冬日和

十時 和子
中川 すみ子

難波 篤直

西垣 順子

西村 敏子

秦 和子

福本 すみ子

藤本 秀機

宮越 久子

山崎 里美

山崎 真義

山本 丈夫

和田 郁子

和部 法子

渡部 法子

横田 矩子

吉田 宏之

栗倉 昌子

飯田 美千子

伊藤 憲子

大越 義雄
大島 みよし

琥珀集

年 玉

西郷 慶子

人摘まず鳥もつつかず蜜柑畑
毛糸屋に児と選びたり白と紺
寒風に応へ園児のこ糸高き
年玉や夫より貰ふ電子辞書
寒椿庭の昏きにしろ点す
少年の寒夕焼に小石蹴る
もののふの塚を抱きて雪をんな

漁師宿

鈴木 照子

天馬の背

山口キミコ

水仙や海鳴り響く漁師宿
寒夕焼男は日本海が好き
子の箸に解かれ黄の濃き寒卵
言ひ過ぎて傷つけ合うてなづな粥
少年の白き筒袖初稽古（合気道）
左利きが多数の家族祝ひ箸
赤手袋しかと早朝散歩癖

同胞の順の昇天年の暮
夫婦づれの兄妹揃ふ冬の通夜
正月の慣ひ潜ませ喪に服す
初夢の天馬の背中亡兄の影
佐世保独楽飾れば感じ海の風
これやこの伏見稲荷の初詣
賽銭の飛び交ふ社殿三ヶ日

投げ銭

冬の昼抹茶碗買ふ萩の旅

冬日影松陰塾は三畳半

玻璃越しの眼下に梅田聖夜の灯

待ち人に黒豆届け大晦日

年賀状今年最後と綴る友

腰縄の猿に投げ銭三日はや

札を呑み天を焼くかに大とんど

橋本 靖子

聖 樹

北尾 章郎

餅搗の音聞きたしとせがむ見ら

点滅を忘じし聖樹孤独感

駅伝のたすきの重さ三日かな

煤掃に飛ぶ声まるでカーリング

有馬温泉より天下睥睨初茶の湯

根掘り葉掘り出所質して薬喰

二つ三つ捨句拾ひぬ古日記

菅 浦

坂上 香菜

七 種

中村ふく子

近江野に俄かの雨や冬景色

雪原に虹の掛りて比良ふもと

雪掻きの済みたる浦や鳶の声

菅浦の要害の門雪しづく

涛除けの石垣二重寒の浦

除雪車の待機十台湖北道

高らかに鳶呼び合へり寒日和

七種や嬰の口許の薄みどり

初釜や豊饒の師の一つ紋

奈良太郎響く千年年新た

ビンゴの窓開くたび囃す女正月

採血のテープを剥す冬至の湯

いつになく長逗留の風邪の神

賽銭の行き交ふ頭上宵戎

ものの芽

国包 澄子

配り餅

松岡 和子

ポン菓子 of 軽さ散らばる小六月

一坪の出店はみ出す暮の市

風掬へし大空の凧子に託す

美人画の眉にも似たり寒の月

しきたりの手抜きを嘆くごまめの目

福娘金の烏帽子のおもてなし

ものの芽のあまた天指す日和かな

鷹舞へる

片岡久美子

里雑煮

笹井 康夫

義士の日はなやぎひと日鄙の町

紅の濃き子供歌舞伎や声冴えて

鷹舞へる空へ勝鬨義士の列

寒風へ樗の千手武人墓地

粉雪舞ふ電光ニュース果のなき

あるじみぬ部屋に広がる寒さかな

嬰の動画繰返し見る炬燵の間

寒晴れや漬物石の沈みゆき

初日記過去も未来も慈しみ

嬰を真似て落葉溜りにダイビング

持ち寄りて老尼の庵女正月

一笛の調子はずれや獅子の舞

配り餅餡の塩梅褒めらるる

根の道をひたすら登り初詣

雪深々灯火の渡る鍋囲む

鳥声や街の静寂に冬の川

形容詞数多浮びぬ里雑煮

今年こそそのこそに力の筆の跡

峡深き闇に零るる冬灯

短日や気のせかさるる日の続き

早仕舞柚子湯にいやす身の軋み

福寿草

竹内 悦子

初雀つくばひに来て囃しけり
風水を信じ植ゑたる福寿草
数へ日や大売出しの店仕舞
除夜詣三井の梵鐘聞きながら
箸紙や嬰の名記するに筆はづみ
雪催出掛けることにためらうて
御降りや三井の山々よく見えて

冬の日

中井 弘一

透き通るガラスに冬が来たりけり
眼を閉ぢて唱歌聞き入る冬の午後
餅つきや穏やかに日は流れける
冬ざれに薬ひとつ見つけたり
冬の朝地球は凜と自転せる
一年をどっぷり沈め柚子の風呂
心の臓大つごもりも鼓動せる

福寿草

中本 吉信

平凡に自足のくらし福寿草
初日の出七十路の命重ね来て
淡き日を重ねたる色実南天
その元氣授かる子等へお年玉
順番の最後は喃語初電話
小恙の今を甘受や青木の実
生き続けることにこそ価値數柑子

七日粥

西田 史郎

北風が吹き抜けて行く高架駅
羽子板市ひときは目立つ安倍総理
家長には家長の役目お元日
正月二日は京風となる雑煮かな
老いたれば今年また減る賀状かな
不忍池柵に並べるゆりかもめ
七日粥おせち料理のなほ残り

病室にて

車椅子自在に冬の廊下往く
麻酔覚め窓一ぱいの冬景色
冬晴れや病床に置く虚子句集
病室の窓に初雪ちらほらと
病室の友と新年祝ひける
冬萌を踏みて遊びし遠き日よ
退院の吾を祝うて冬日差

女正月

冬靄の晴れたる湖上神の島
操りの三番叟舞ふ初芝居
日矢一条注連新しく夫婦岩
初湯して九十年を振り返る
持ちよりのむかし話や女正月
冬薔薇ピンクを胸に友を訪ふ
ままごとのけふの馳走や竜の玉

能勢 栄子

年あらた

増田 一代

金婚の夫との生活年あらた
ぐい呑みを並べて父子去年今年
母の手に子の手重ねて千代の春
新雪の比良の峰々茜差す
足袋を縫ふ祖母は仕上げの木槌音
弟妹とつきぬ話や冬うらら
元旦やスカイツリーの輝ける

藤見佳楠子

粉雪の舞

松田 和子

粉雪の舞軽やかにアン・ドウ・トア
をさな子の「雪やこんこん」咳こんこん
初雪の道はつらつと子らの傘
初春の笑顔はち切れ学べる子
天空へ祈る思ひの年賀状
初春を老老介護のボランティア
病床の母も眺めむ雪世界

瑠璃集

冬うらら

田中 浅子

目に浸みるイルミネーション十二月
土鍋に炊く粥にとろりと寒卵
乗り越して降車ボタンや冬うらら
冬ざれの水琴窟のひびきかな
風呂用のあばた柚子盛り無人店

鯨

常田 創

冬至柚子

杉本 綾

三十の男瘦せけり冬の虹
息白く勉強のこと励ませる
〇頭の鯨がいると想像す
寒すずめ命集めて夜に入る
鈴なりの蜜柑実らせ吉田翁

裏山にひともと燃ゆる櫛紅葉
愛宕山は冬の楽園夕焼くる
溪紅葉のふところ通る獣道
手につつむ湯呑のぬくみ玉子酒
ご自由にお取り下さい冬至柚子

去年今年

森下 康子

冬深む

中井登喜子

恙なく迎ふる年や初雀
脱三日坊主を誓ひ初日記
元日やおでこの面砲気にする子
人生をさいころで決め初ゲーム
初夢の亡父ダンディーに杖を持つ

歳末の福引回す白ばかり
あんかう鍋われに足りぬはコラーゲン
色気なき飯場に聖樹煌めきて
縁談を掃き清め待つ冬深む
寒椿落ちしがままに客迎ふ

三月号月評

塩路 隆子

初句会もしくは初投句の句を拝見、皆様の素晴らしい句に感動しています。実力をつけられた皆様の句をわくわくしながら鑑賞させていただきます。

水仙や海鳴り響く漁師宿

鈴木 照子

越前へ旅をされたのであろう。海へ向かってなだれるように水仙の斜面の見える越前市みたりの風景であろう。水仙をバックに波の荒い白の漁師宿にびびく海鳴り。視界の広がりリズムよく詠み込まれている。

もののふの塚を抱きて雪をんな

西郷 慶子

「雪をんな」そのものは架空のものであるが詩情あふれた季語である。戦国の武将の塚と想像する。そけ武将を慕って塚を抱き傍を離れぬ「雪をんな」が愛しい。視点の良い作品である。感動！

初夢の天馬の背中「兄の影

山口キミコ

昨年末一〇〇号記念の原稿依頼書類を発送の作業中に亡くなられたお兄様のことを詠まれた作品である。善行を積まれたお兄様であろう。「天馬の背」に乗り悠々と空を翔けておられるお兄様の姿を初夢に見られた安心立

命の作者の気持ちが表れた秀句。

腰縄の猿に投げ銭三日はや

橋本 靖子

親しまれていた猿軍団も解散になるとか、記念となる句であろう。安全のための上五の出だしの措辞「腰縄」をした猿、その演技に向かつての「投げ銭」が効果的である。やんやの人声、猿の姿のおどけた姿が浮かぶ。のどかな三日なればの風景！

雪掻きの済みたる浦や鳶の声

坂上 香菜

奥琵琶湖にある陸の孤島と言われた湖岸の集落である。中世には菅浦だけの自治を形成、四足門を設け出入を厳しく取り締まった浦である。雪掻きを終えた村落に、のんびりと鳶の舞っている穏やかな風景。上手く纏められている。

点滅を忘じし聖樹孤独感

北尾 章郎

夜の街角に立つクリスマスマスを終えた聖樹の孤独感をうまく表現されている。「点滅を忘じ」「人が振り向かなくなつた聖樹」に想いを掛ける作者の優しさ、芭蕉の「夏炉冬扇」の風雅を愛した芭蕉の心地かもしれない。

(以下略)